

2019 年度新入生向け読書案内「邂逅」資料

2019 年に名前をあげた本は以下です。

- 「今日の治療指針 2018 年版」 医学書院
- E.T. Bell 「Men of Mathematics」Kindle 版
- 南場智子 「不格好経営」 日本経済新聞社

- エドワード・フレンケル 「数学の大統一に挑む」 文藝春秋
(Edward Frenkel 「Love and Math: The Heart of Hidden Reality」 Kindle 版)
- Jim Collins, Jerry I. Porras 「Built to Last: Successful Habits of Visionary Companies (Good to Great)」 Kindle 版
- Yuval Noah Harari 「Homo Deus: A Brief History of Tomorrow」 Kindle 版
- Scott Galloway 「The Four: The Hidden DNA of Amazon, Apple, Facebook, and Google」 Kindle 版
- 宮本恵理子 「子育て経営学」 日経 BP 社
- Ron Chernow 「Alexander Hamilton」 Kindle 版
- Doris Kean Goodwin 「Team of Rivals」 Penguin

Kindle 信者の私にしては、この一年間は Kindle 以外の読書時間が多かった。Kindle から離れた切っ掛けが「**Love and Math**」だ。「**Men of Mathematics**」を読んで、ああ、数学者になれたならばよかったのにと考えた。その流れで「**Love and Math**」を読んだのだが、これが難物であった。ソビエトに生まれたユダヤ人数学者が書いた本で、自伝的部分は読み物として面白く読めるのだが、数学の議論になるとわからない。寸分もわからない。可笑しいくらいにわからないので、翻訳本「**数学の大統一**」をブックオフで購入し、読み直した。以降、ブックオフを愛用し始めて、Kindle が 6 割、中古本が 4 割の配分となった。

「**Men of Mathematics**」に話を戻す。この本に登場するほどの才能ある人物に生まれていれば、多少の勝手気ままは許されるだろうと羨ましい。生まれ変わるものならば、こんな数学者になりたいものだ。破天荒の生き方が許される大芸術家でもよいけれど、書斎にこもって仕事ができる数学者の方が、出不精の自分にはなじみやすい。もっとも、本書の読後のもう一つの感想は、数学者は意外にも実務に長けている人が多いという驚きだった。映画「A Beautiful Mind」の影響か、数学者と言えは変人、奇人ばかりかと思いついていたのだが、社会的にも活躍した人の方が多いと知った。当然、コミュニケーション能力も備えていただろう。「**Love and Math**」の著者も NASA のプロジェクトにも参加して、おまけに映画まで作っている。いずれにせよ、自分の及ぶところでないのが、誠に残念だ。

この年齢になって、自分は一体、何になりたかったのだろうと考え込んでいる。何を今さら、

2019 年度新入生向け読書案内「邂逅」資料

還暦過ぎて自分探しでもないだろうと突っ込まれそうだが、何とも困った時代に生まれ合わせている。42キロのマラソンを走って、そろそろゴールインと思っていたら、ゴールがずるずると後ろに下げられて、あと20キロ、30キロ走ってくださいねと言われているような、そんな目にあっている。年金受給を75歳にしますと言われたならば、それまで仕事をしないわけには行かない。経済的な問題はさておいても、100歳まで生きるとなれば、残りの30年、40年、縁側で日向ぼっこをしているのでは間がもたない。どうしたら有意義に過ごせるのか、そう考えるのは道理だろう。いったい、何をすればよいのか。今までの路線を継続しても、先が読めている。どうせならば、第二の人生、大転回をしたいものだ。

世の人のすなる、Ruby、Python というものを、我もしてみむとてするなり。Ruby、Python をにわかに学習しはじめたのは、そんな心境の影響だが、こちらは一通り、眺めてみると、必要ならば然るべきプログラマーにプログラムを頼めばよいだけで、自分が細かなルールまで覚える意味はないと見切りがつきつつある。「**今日の治療指針2018**」に向かったのも、第二の人生の選択と無縁ではないが、それだけでもない。医療の進歩はすさまじい。一昨年、心房細動治療の目的で、東京医科歯科大学病院に入院したとき、自分が働いていた病棟とは様子がすっかり違うのに感銘を受けた。T 先生、H 先生、他、皆さまにお世話になって、お蔭様で心房細動は完治した。しかるに、昨年秋には、義兄が心不全で亡くなった。義兄は五十歳過ぎて重篤な心筋梗塞を経験し、かろうじて一命を取り留め、社会復帰を遂げ、以来、十数年間、機能の低下した心臓と付き合いながら六十五歳過ぎまで仕事を継続してきたが、ついに力尽きて六十七歳で終焉を迎えた。その間、大腿筋から調製したハートシート移植も経験し、ついには、人工呼吸器はもとより、大動脈内ポンピングに人工心肺、ありとあらゆる手段が講じられ壮絶ともいえる最期になってしまったが、その間、CCU に出入りして、医療の進歩に驚きを新たにした。医療の進歩というよりも医療機器の進歩と言うべきかもしれない。数年前、母が乳がんになった時には、乳管内視鏡なるものを見て、吃驚した。私は完ぺきに浦島太郎、医師免許を持っているとはいえ医師と名乗るのも気が引ける。医学科学生に講義をする手前、多少なりともキャッチアップしなくてはという義務感もあって「**今日の治療指針2018**」を読んだ。このようなレファレンスをカバー・ツ・カバーに読む人も珍しかろうが、とにかく読んでみた。すると、面白かった。理由は不明ながら、とにかく、楽しく読めた。心配していた通り、自分の生化学の講義内容の間違いも発見した。鉄イオンには2価と3価があって、ビタミン C によって還元されると吸収がよくなるから、鉄剤を処方するときはビタミン C を一緒に投与すると講義していたのだが、今時の鉄剤はクエン酸との化合物だから、ビタミン C 併用の意味などないそう。ずっと、間違ったことを教えていたことになる。やれ、やれ、本当に時代遅れになってしまった。車の免許には更新手続きが必要なのに、医師免許には更新手続きが必要ないのは、筋が通らない。けれども、私の立場からは有難い。

2019 年度新入生向け読書案内「邂逅」資料

この先、AI とロボットが医療の姿を一変させるであろうことは想像に難くない。診断と治療方針の決定は AI にゆだねる方が、間違いが少ないとも思われる。AI によって人間が駆逐されると悲観的になるか、AI によって人間が一段と進歩（あるいは進化）を遂げると考えるか、受け止め方は様々だろう。「**Homo Deus**」は昨年度に取り上げた「**Homo Sapiens**」と同じ著者の本だ。前半部分は類書に登場する話題が焼き直されているに過ぎないとも言える。後半になって、Homo Sapiens がやがて Homo Deus に置き換わる、進化するかもしれないという世界観が論じられる。AI を論じる本としては、Ray Kurzweil「**The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology**」が有名でベストセラーになっているけれども、こちらは読みかけて半ばで興味を失って放棄した。だから、推薦しない。AI によって人間がどうなってしまうのかを論じるより、とりあえず、これから AI で何ができるようになるのかビジョンを見せてくれる方が、私の関心には合致する。先日、本学で行われた AI 創薬をテーマとする会合で、AI 創薬のコンテストでグランプリを何度かとった DeNA 所属の研究者のお話を伺う機会があった。複数の機械学習を組み合わせで治療標的分子に合致する低分子化合物を探索するという本題の話と別に、DeNA という会社の雰囲気を感じ取られて面白かった。モバゲーの DeNA だ。ゲームを全くしない私は、これまで DeNA には、どちらかというとながてな印象をもっていた。ところが、DeNA の活動はもはやゲーム開発に留まらない。機械学習の世界的コンテスト Kaggle の参加者を多数、リクルートしている。その一方で会社組織の構築にゲーム性を持たせている。にわかに興味を惹かれ読んだのが、DeNA 創業者の「**不格好経営**」。減法、面白い。IT 産業も「**The Four**」のレベルになるとグローバル超大企業だが、DeNA には、まだ手作り感がある。私の中で、DeNA に対する好感度が上昇し、AI 創薬でも成功してくれるとよいなあと願っている。ただし、IT 産業は栄枯盛衰が激しくて、「**The Four**」を読んでも、「そういえば Netscape って、あったよね?」「Netscape を買収した AOL は、今は何になっているの?」と、戦国武将割拠の歴史を振り返るようだ。DeNA は、果たして生き残れるのか?「**不格好経営**」には DeNA Quality として社員に求める 4 項目の資質が掲示されているが、会社としての Vision は明記されていない。DeNA は、果たして visionary company として確立されて行くのだろうか? 南場智子氏はマッキンゼー出身だから「**Built to Last**」を読んでいないはずはない。Visionary company を意識して DeNA を経営していると思う。とはいえ翻って、然るべき会社の経営者で「**Built to Last**」を読んでいない人の方が少ないだろうから、にもかかわらず、全ての会社が visionary company にならないのはなぜか、そちらを議論の方が有益にも思える。「**Built to Last**」では、数百名の経営者にアンケート調査をして候補をあげてもらい visionary companies を選抜している。二人の著者はスタンフォード大学でアカデミックキャリアを持ち、同書は、one of the most influential business books of our era と評されている位だから、疑義を呈すべきでないのかもしれないが、回答率が半分にも満たない、しかも、質問にも回答にも恣意性をはらむと思われるアンケートの結果をもとに visionary companies を定義する方法は、実験科学に携わる者としては違和感を禁じ得ない。こうした

2019 年度新入生向け読書案内「邂逅」資料

解析にこそ AI を使うべきでないのか？売り上げ、利益、株価、特許件数、市場占有率、などの特徴量を使って機械学習をすれば、どんな結果が出るのだろう。

前述のように DeNA の社員の方の話を聞いたことに後押しされて、「**不格好経営**」を読みだしたのだけれど、この本は、「**子育て経営学**」の中でも引用されている。「**子育て経営学**」はベンチャービジネスを立ち上げて成功軌道に乗せた男性経営者達が子育てにどのようにコミットしているか、子育てにおいて心掛けていることを何かを尋ねたインタビューから構成されている。著者の主たる関心は、ダイバシティーが重要視される今日、それをどのように実現すべきかのモデル探しにあると推察されるが、同時に、子育てと企業経営の共通点が浮き彫りにされている。「**不格好経営**」にせよ、「**子育て経営学**」にせよ、十八歳、十九歳の諸君には、自分とは無縁の遠い先の話と感じられるかもしれないが、まだ学生だと自分を枠にはめずに、両書に横溢するチャレンジ精神に感化されてほしい。うか、うかと目の前のことに追われてすごしていると—カリキュラムに従って授業に出席して定期試験を受けて、部活動に加わり、アルバイトをして、飲み会（ただし、お酒は二十歳に達してから、しかも、ほどほどに；私はアルコールは神経細胞を破壊すると信じているので、お酒を飲まない）を楽しんで、決まりきった学生生活を送るだけでも、何かしている感じはするだろう—たちまち学生時代は終わってしまう。その気になれば、もっと実質的に社会に関わる活動だって、学生の時からできる。いや、学生だからこそ、できるかもしれない。そして、実際、そうしている人たちもいる。時は金なり。一刻、一刻を大切にしてほしい。

六十歳過ぎて、「自分は何になりたかったのだろう？何になれたのだろう？」と自問して、呆然としないためにも、一度、ぐっと立ち止まって自分を見つめなおして考えてみるとよい。自分の本領はどこにあるのか？私はここでも AI に期待している。おぎゃあと生まれてから、幼稚園、小学校、中学校と過ごす間の行動を逐一解析していけば、ある個人がどのような活動に最大の親和性があり、どのような領域に向かうと、もてる力を十分に発揮できるのか指示できるようになると考える。自分が何に向いているかどころか、何をしたいのが本心かさえも、案外、わかりにくいものだ。周囲の評価、動向に流されがちなのが人間だ。AI の導きに従うというと宗教染みるが、AI のご託宣を参考にしても損はないだろう。破壊的な言辞と批判にさらされるかもしれないが、たまたま高校時代の学業成績が優秀で、医学部合格の勲章ほしさに受験して合格してしまった人がいるのなら、自分が本当にやりたいこと、なんとしても達成したい burning desire は何なのか、手遅れにならないうちに一度は問い直すのも悪くない。

「**Alexander Hamilton**」の著者 Chernow は、アメリカの司馬遼太郎だそう。一時期、司馬遼太郎氏の本を随分と沢山読んだので、それでは Chernow も一冊くらい読んでみようかと思って手に取った。アメリカ合衆国は稀有の国である。世界中でたった一つ、理念を基に

2019 年度新入生向け読書案内「邂逅」資料

成立している国家である。地球上の他の国はいずれも地縁、血縁が基本となって国家が成立している。かつての社会主義国は、イデオロギーを基に作られた国家のようにも見えるが、実態は違う。専門的な知識をもたない私が言うことだから、話半分に聴いておいてほしいが、ソビエト連邦は、ロシアの後進性を克服するための方便として社会主義を採用したにすぎないように思われる。中国人民共和国も列強に浸食にされた19世紀、20世紀前半の状況がなければ共産主義国家の様態を取らなかったのではないだろうか。中国は揚子江、黄河を中心とする地域に居住する10億を超す漢民族を前提とする国家であって、どのような政治形態をとるかは後付けに過ぎない。世界中、ほとんどの国家はこのようにして成り立っている。だからこそ、政治信条が異なる者同士がいがみあい対立する。意見を異にするならば、袂を分かってばよいのだが、そうはいかないから内紛する。政治体制Aを支持する者は集まってA国を作る、Bを支持する者はB国を作る。これなら、一国における体制論議は起こらないはずだが、そうはならず、先に国家があって、その中で体制を論じている。もとよりアメリカも例外ではない。共和党と民主党が対峙している。「**Alexander Hamilton**」を読むと、連邦重視か州重視か、建国の初めから二つの流れがあるとわかる。Washington、Hamiltonは連邦派で、Jeffersonはアンチ連邦派。Jeffersonに代表されるリパブリカンが、現在の共和党に直線的につながるとも言えず、捻じれがあってわかりづらいが、とにかく連邦政府は小さくあるべきとする共和党、大きくあるべきとする民主党と、建国以来、二軸があるのは間違いない。ましてや南北戦争まで体験している。しかし、それでもアメリカ合衆国は稀有の国だと思う。星条旗に忠誠を誓うならば、然るべき手続きの後、アメリカ国民として受け入れられる。元の出自がどの国であれ、どの民族であれ、どの宗教を信じていようが、アメリカ国民はアメリカ国民だ。アメリカ合衆国の理念に従う者、それがアメリカ国民のアイデンティティーになる。アメリカのテレビドラマを見てみると、リパブリカンとデモクラットの対立が茶化しの対象になる場面がしばしば現れる。公共のテレビ放送の場で、銃の保有を擁護するリパブリカン、中絶を容認するデモクラットが冷やかされる。日本のテレビドラマで、共産党支持者と自由民主党支持者が政治信条を話題にして言い争うなど考えられるだろうか？さらには、人種偏見でさえ、テレビドラマのエピソードとして取り上げられる。銃を規制しようとする政治家が襲われる、黒人が白人警察官から暴行される。どれもシリアスな問題であるのに、それは、それとしてテレビドラマのネタになってしまう。強引な解釈かもしれないが、星条旗への忠誠が担保されるならば、あれこれ意見の相違は些事である。そんな余裕が感じられる。アメリカ合衆国の人口は現在、3億を超えている。私が中学生の頃は2億だったように記憶する。人口減少の心配などない。日本とは大違いだ。ここから論じるのが本題である。日本は少子高齢化、労働人口減少対策として外国人労働者を受け入れようとしている。経済活動を維持するためには避けて通れない選択肢だと、私も思う。しかしながら、相手はロボットではない。人間である。安易に労働力としてのみ換算するのは正しくない。同化が必要である。日本に定着するのであれば、日本国の理念を奉じて、同化してもらう必要がある。ところが、では、日本国の理念とは何かと問われて明解に答えられる

2019 年度新入生向け読書案内「邂逅」資料

人がいるだろうか？日本思想の根源には、儒教、仏教、神道、武士道があって、日本で生まれ、日本で教育を受けた者であれば、右翼から共産主義者までが共有している規範のようなものがあるような気は漠然とする。だが、それを明文化することは難しい。しかし、やはり規範はあると言いたい。その規範に順化してもらう保証なしに、安易に外国人を受け入れていくと、日本国のアイデンティティーは危機にさらされる。私は国家主義者ではない。民族、宗教、文化を異にする人々が集い、新しい日本国を形作るためには、それなりの手続きが必要だと主張しているにすぎない。そこを疎かにすると、却って、排斥運動が起こり、ヘート・スピーチが広がり、悲劇が起こる。ここもまた、専門家ではないので、無責任な発言になっていないか心配なところだが、現在のヨーロッパの状況がそれであるようにも見える。ドイツの人口 8 0 0 0 万の 1 0 % 弱が外国人だという。フランスに至っては移民率 1 0 % を超えている。それらドイツ、フランス以外に出自を持つ者たちが、ドイツ国、フランス国の理念を奉じる保証があるならば、その者たちは、もはやドイツ人であり、フランス人である。おそらく、その確証がないがゆえに、排斥が起こる。トランプ大統領がメキシコとの国境に壁を作ろうとするのも、違法に、手続きを踏まずにアメリカ合衆国に流入する者が多いからで、壁を作る、作らないとは別に、入国したいのならば正規手続きを踏め、アメリカ合衆国民となるべき審査を受けないままアメリカ合衆国に入り込むな、という主張であれば、筋が通っていると思う。なお、ここでも断るが、私はトランプ大統領を積極的に支持しているわけではない。ただし、先の大統領選挙の際の、ヒラリー・クリントン候補とトランプ候補のやり取りを視て、ヒラリー・クリントン候補の受け答えにも好感は持たなかった。私には投票権がないから論じるのも空しいが、トランプ大統領の当選も、宣るかなと受け止めた。ロシアスキャンダルがウォーターゲートのようなになれば、次の選挙でも、トランプ大統領が再選される可能性はゼロでないと思う。話を戻すと、曖昧さは、結局は寛容につながらず、事を紛糾させる。私たちは、彼らの例に学んで行動しなければならない。そのためには、日本国の理念は何かを突き詰める必要がある。繰り返すが、その理念は、右翼であれ、共産主義者であれ、新興宗教の信者であれ、日本の文化的伝統の中で生まれ育った者（地理的に日本の外で育った者も含む）であれば、暗黙の裡に共有している理念である。暗黙の理念を顕在化させ、その理念を中心にダイバシティーのある日本国を実現しなければならない。Visionary company の実現の第一歩は、vision を明示することだ。Visionary country の実現も同じだろう。「**Alexander Hamilton**」は、国の成り立ちについて考える良い題材になる。数年前に読んだ「**Team of Rivals**」と合わせて推薦する。「**Team of Rivals**」は Lincoln の伝記で、南北戦争、奴隷解放がテーマになり、ここでもアメリカ合衆国がアイデンティティーを維持するために並々ならぬ努力を払う姿が伺われる。日本国もあまり、のほほんとしていくべきではない。そして、それは、この先、5 0 年、6 0 年と日本人として生きていく諸君の問題だと思う。